

先生の顔

竹久夢二

青空文庫

それは火曜日の地理の時間でした。

森先生は教壇の上から、葉子ようこが附ふ図ずの蔭かげにかくれて、ノートへ
いたずらがき
戯いたずらがき書かをして見つけた。

「葉子さん、そのノートを持ってここへお出いでなさい」不意に森先生が仰おっしゃ有あったので、葉子はびっくりした。

葉子は日頃ひごろから成績の悪い生徒ではありませんでした。けれど鉛筆と紙さえ持つと、何時いつでも——授業の時間でさえも絵を画かきたがる癖がありました。今も地理の時間に、森先生の顔をそつと

写生していたのでした。そして葉子は森先生を大変好きでした。

森先生と呼ばれて、葉子はそのノートを先生の前へ出した。先生はすこしこわ厳しい顔をしてノートを開けて御覧になった。するとそこには、先生の顔が画かいてあった。

森先生は、それをお読みになつて、笑いたいのを我慢して、やつとおっしやこう仰有あつた。

「今日は許してあげますけれど、これからは他ほかの時間に絵を画いてはいけませんよ。これは私が預つておきます」

葉子はお辞儀をして静かに自分の席へつくと、教壇の方を見あげた。けれど森先生は、決して葉子の方を御覧にならなかつた。葉子にはそれが心配でならなかつた。

やがて授業時間がすむのを待ちかねて、生徒達は急いで家へ帰っていった。葉子は一番最後に学校の門を出て、たったひとり帰ってきた。途途みちみちにも今日の地理の時間が心が放れなかった。

2

つぎの日、葉子はすこし早めに家を出て、森先生のいつも通っていたいらっしやる橋の上で先生を待っていた。やがて先生は、光子みつこという同級の生徒と連れだつて歩いていらした。葉子は丁寧にお辞儀をした。先生は何事もなかった前のように、にこやかに「お

はよう」を仰有った。それで葉子は、ほっと安心した。そしてうれしさに忙しくて、悪い気ではなく光子に「おはよう」を言うのを忘れていた。

「葉子さんおはよう！」光子はわざと意地悪く葉子の前へ突立つてお辞儀をした。そして「葉子さん、今日は廻り道まわをしていらしたのね」

と光子は科めるとがように言った。葉子は日頃ひごろから意地の悪い光子が好きでなかった。

「ええ」と葉子はおとなしく答えた。

森先生は、葉子のリボンをなおしてやりながら、

「葉子さんのお宅うちは山の方でしたねえ。お宅の近所の野原には沢

山に草花が咲いていてどんなにか好いでしようね」

「先生はあんな田舎の方が好きですか」

「ええ、毎日でもゆきたいと思いますわ」

「先生、私の宅へいつかいらっしやいな。そりやあ綺麗な花があるの。だって、葉子さんのお宅の庭よかずっと広いんですもの」

光子が勢こんで言ったけれど、誰もそれには答えなかった。

3

つぎの日も、そのつぎの日も、葉子は森先生を橋の上で待合し

て学校へ行つた。けれどノートの事については何にも仰有らなかつた。葉子もそれをきこうとはしなかつた。

光子は葉子が先生と一緒に学校へ来るのが妬しくてならなかつた。その週間も過ぎて、つぎの地理の時間が来た。

葉子が忘れようとしていた記憶はまた新しくなつた。葉子は、おずおずと先生の方を見た。先週習つたところは幾度となく復習して来たから、どこをきかれても答えられたけれど、先生は葉子の方を決して見なかつた。そして光子に向つて、

「パリはどこの都ですか」とお訊ねになつた。すると「佛蘭西の都であります」と光子が嬉しそうに答えた。

地理の時間が終ると、運動場のアカシヤの木の下の下へ行って、

葉子はぼんやり足もとを見つめていた。何ということなしに悲しかった。

「葉子さん」そう言つて後あとから葉子の肩を軽く叩たたいた。それは葉子と仲なかよし好あきこの朝子であつた。朝子は葉子の顔を覗のぞきこんで「どうしたの」ときいた。

「どうもしないの」そういつて葉子は笑つて見せた。

「そんなら好いいけど。何だか考えこんでいらつしやるんですもの、言つて好いことなら私に話して頂ちようだい戴だいな」

「いいえ、そんな事じゃないの、私すこし頭痛がするの」

「さう、そりやいけないわね」

葉子はじつと思おも入いつて朝子を見つめて「朝子さん」

「え」

「あなた森先生お好き？」

「ええ、好きよ、大好きだわ」

「あたしも好きなの、でも先生は私のことを怒っていらっしやる様なの」

「そんなことはないでしょう」

葉子は、朝子に心配の種を残らず打明けた。それから二人は森先生のやさしいことや、先生は何処どこの生れの方だろうという事や、先生にもお母様があるだろうかという事や、もし先生が病氣なさったら、毎日側そばについて看病してあげましょうねという事や、もしや死んでしまっても、先生のお墓の傍そばに、小さい家うちをたてて、

先生のお好きな花をどっさり植えましようという事などを語り合
った。

4

それから三日目の朝、学校へゆくと森先生が病気だという掲示
が出ていた。葉子ようこは、学校から帰ると大急ぎで野原へ出て、いつ
ぞや森先生が仰おっしゃ有った、お好きな花を抱えきれないほどたくさ
んに摘みとった。

葉子は、いつか森先生に出逢であった橋の所まで来ると、向うから
光子みつこが来るのに会った。

「何処へ行くの？」光子がいきなりきいた。森先生の許へといえ
ば、また何とか意地悪い事を言われるのがいやさに、それとなく、
「ちよつとそこまで……」と答えた。

「隠したつて知つててよ、森先生の許でしょう！ 先生の所へい
つたつて駄目よ。先生はあなたのこと怒つていらしてよ。そして
あなたを大嫌いだつて」

さも憎らしそうに光子は言つて、葉子の持つている花を見つけ
た。

「まあ、それを先生の許へ持つていらつしやるの。そうでしょう
先生の許にはもつと綺麗な花が山のようにあつてよ。だつて温
室からとつていったんですもの。でもいらつしやりたいなら勝手

にいくと好いいわ。そんなきたない花を先生はお喜びになるかもしれないわ。あばよ」そう言捨てて光子は行ってしまった。

あとに残された葉子は橋の欄干にもたれて、じつと唇をかんでこら泳ええたが、あつい涙がはらはらと水のうえに落ちた。

葉子はしばらく橋の上から川の水を眺めていたが、手に持っていた花束を水の中へ投捨てて一散うちに家の方へ走った。

5

その日の夕方、森先生の使つかが、葉子の許もとへ一つの包を届けた。

葉子は何事かと思いつつ包をとくと中からいつぞやのノートが一

冊出てきた。葉子は恐る恐るノートをあけた。すると、森先生の
手蹟しゆせきでつぎの事が書かれてあつた。

葉子さん。

あなたの愛らしいノートをお返しする時がきました。

絵を画くことは少しも悪くなかつたのです。ただ、画く時でない時に画いた事だけがいけなかつたのです。あなたが私のために花を摘んで下さったことも、橋の上から川へ流したことも、みんな私は知っています。あなたの心づくしの花束は、私の病室の窓の下を流れる水におくられて、私の手に入りました。私はどんなにあなたのやさしい親切を感謝したことでしょう。

安心して下さい。私の病気はほんの風邪に過ぎません。次の月

曜日からまた教場でお目にかかりましょう。

葉子ようこさん。

どうぞこれからはもつと善い子になって下さい。他のほか稽古けいこの時に絵をか画いたりしないような、そしてお友達に何を言われても、好よいと思つたことを迷わずするような、強い子になって下さい。

それでは

さようなら

青空文庫情報

底本：「童話集 春」小学館文庫、小学館

2004（平成16）年8月1日初版第1刷発行

底本の親本：「童話 春」研究社

1926（大正15）年

入力：田中敬三

校正：noriko saito

2005年9月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

先生の顔

竹久夢二

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>